



北京市副市長に原田市長からの友好のメッセージを贈る。北京市からも今後の交流に暖い言葉が寄せられた。

今回中国を訪問した団員は、市内の各界各層から自主的に参加された方十九人で編成され、十月十四日から二十五日までの十二日間、十月十四日から二十五日までの十二日間、呼と浩特(ほほと)・包頭(ぱおと)の都市を中心に、行政・経済・教育などの分野について視察しました。

では、中国の姿を写したスナップ写真とともに、各分野にわたる感想等を、五十嵐団長の手記により、駆け足ですが報告しましょう。

《市長から友好のメッセージを贈る》

報告をする前に、おことわりしておきたいのは、我が国との社会構成が違うため、一概に比較をすることは困難といわなければなりません。やはり、その国が持つ特殊性を考慮しながら、見たまま、聞いたままの姿を報告したいと思えます。

しかし、私が訪中第一番に感じたことは、率直に言って、あの国づくりのために国民が一丸となって取り組んでいる姿に肌で感じ、私は、地方自治体運営にたずさる者の一人として肝に深く命じておかなければ、と痛感したことでした。

また、訪れた各市委員会各種工場や施設では、心からの歓迎を受け、交された手の暖さは、今も忘れることができません。

訪中第一番目の行事として中日友好協会を表彰訪問し、市長のメッセージを贈るとともに、人的交流、姉妹都市等について意見交換を進めました。

中でも、中国側から積極的に「緊密な友好関係を子々孫々まで続けることを確認すると共に、明年にも小中学生のスポーツ、文化交流等の訪問団を受け入れる」「姉妹都市についても都市の選定を進めるとともに、経済交流も具体的に行動を起せば期待ができる」と郊果的な感觸を得たことは、大きな収穫といえましよう。

《訪問四都市・駆け歩記》

北京の市街に出て驚いたことは、人の多いのと自転車の波。勤務が三動交代制とあって大にぎわいを程していました。

やはり、この国の、国づくりにかける息吹きが感じられました。服装を見ると、ほとんどが人民服ですが、女性のファッションは、



中国の守護神といわれる明の13陵の石象にて友好訪問団による記念撮影

くからの先人の文化遺産を継承していることも、多に学ばなければならぬことと改めて痛感いたしました。

私たちは、天津のじゅうたん工場を見学することにしました。

今や、中国の輸出品目の中で、大きなウエイトを占めるじゅうたんは、三千年の歴史を持ち、人物や花模様など千種近くの図柄を織り上げるといふことでした。

この作製には熟練工でも、六畳分を織るのに二人で二カ月もかかるというので、私たち近代機械化に馴れ生産プロセスを上げるこ

とにとられる者には気が遠くなるような話でした。

また、天津新港の視察をする機会を得ました。中国では上海、大連に続く第三の大港湾というので、一万トンの船舶が一度に二十九隻も接岸できるという大きなものでした。

取扱量は年間千二百万ト、労働者は一万八千人のこと、近い将来には大連港を抜き、上海港に次ぐ大型港湾となることが予測されていました。

近い将来には留萌港から、道北の製品等を中国のどこかの港湾を通して貿易が促進されることが期待されるのではないのでしょうか。

また、私たちは呼と浩特市では、ウラントが牧畜人民公社を訪れました。いわゆる家庭訪問の形で一泊した訳ですが、公社の関係者は約二千人、家畜は四万六千頭(九〇頭はヒツジ、その他は馬、牛、ラクダ等)で、七つの大草原に放牧しているとのことでした。

宿泊施設はパオ(テント造りで内壁はヒツジの皮)で一夜の思い出となりましたが、初体験で、一生の思い出となるでしょうし、あの蒙古大草原を駆けめぐったジンギスカンの姿に夢をはせたものでした。



《近くて遠い国・中国》といわれてから久しいですが、日中国交が回復してからは急速に友好の輪が広がりを見せている今日、全国的に積極的な交流が図られています。このような状況の中で、市内においても民間と行政とがタイアップし、中国の現実の姿を知り、今後の経済活動の中で国際貿易港をかかえる本市の行政運営の糧とすることを目的に、初の《日中友好訪中——五十嵐悦郎団長(市総務部長)》を編成して、中国4都市を訪問しました。そのレポートを特集しましょう。

ここで労働者の賃金についてふれてみましょう。一級から八級までに分けられており、一級は毎月四十元(日本円百五十円ぐらい)八級で百十元。大卒の初任給は五十五元、普通の労働者で四十九元ぐらいのことです。我々の物価や制度とも違いますので、比較は難しいことといえましよう。

ちなみに、自転車は百五十元、テレビは国産で四百元(普及率は白黒五軒に一台とか)日本製で五百十元とのことでした。

中でも三種の神器はラジオ、カメラ、自転車であったのが、今日ではテレビ、ラジカセ、扇風機、洗たく機に変わっていったか。

テレビは月給の五カ月分ということですが購入者が多く生産が追いつかないということでした。

次に包頭の民族幼稚園、民族小学校を訪問しました。小学校では「蒙古族主体の五年制で九百九十五人、二十六クラスで、数学・漢字・英語・体育・美術・音楽・政治・合唱など十科目。さらに徳育・知育・体育を伸ばすことと教育の四つの現代化」に努力されているとのことでした。

制度としては五(小学)三(中学)二(高校)

四(大学)と分けられ、小中学就学数は二億一千万人を超えるとのことでした。また、大学は五百九十八校と増えているようですが、競争率も激しく、わずかに六割ぐらしか進学できないとのこと、我が国とは大きく違います。しかし、文盲一掃ということ、革命事業のために自己の利益を従属させるよう、労働を愛するよう教育している点も特長的な点でした。その他、多くの施設や制度等の見聞もいたしました。

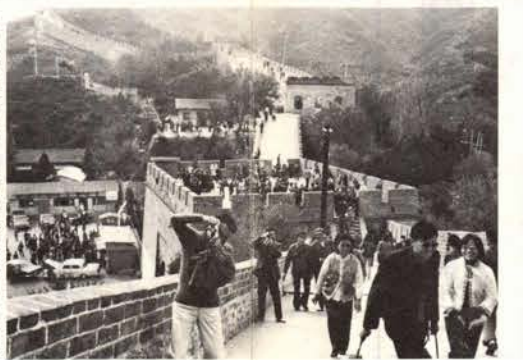
紙面の都合で、ホンのさわりを記してしまいましたが、新しい友人を得たことは、本市においても大きな成果があったと思います。



天津の第三じゅうたん工場



願和園の石舟・市民の憩いの場である



万里の長城で中国観光のメッカとして中国民を始め、各国の観光客でにぎわう



天津新港ではクレーンの音も高く作業が進む。躍進する中国の足音のよう



北京 天壇公園にて